幼児の発達への保護者と保育者の気づき

森田愛子・藤井真衣

Awareness of child development in parents and caregivers

Aiko Morita and Mai Fujii

本研究の目的は，どのような領域の子どもの発達に保護者が気づきやすいかを調べること，保育者を基準としたときの，保護者の気づきやすさについて検討すること，様々な種類の行動の発達に育児がどの程度影響すると保護者が思うかを検討することであった。6 領域 20 項目の発達チェック項目に関し，保育園・幼稚園の 3 歳児クラスの保護者 72 名と保育者 7 名，4 歳児クラスの保護者 114 名と保育者 3 名から質問紙で回答を得た。主な結果は以下のとおりである。保護者は生活技術の発達に最も気づきやすかった。3 歳児クラスの保護者は，言語理解の発達に比較的気づきにくいことがわかった。また 4 歳児クラスの保護者は対人技術の発達について他の領域より比較的気づきやすいこともわかった。保育者の気づきやすさと比較しても，保護者の気づきやすさの得点は高いケースが多かった。ただし社会性の発達については，保育者のほうが気づきやすい傾向がみられる。育児の影響については，3 歳児・4 歳児クラスのいずれの保護者も，生活技術については，育児の影響が大きく，粗大運動の発達については育児の影響が小さいとみなしていた。

キーワード：保護者，保育者，幼児，発達，気づき

問題

親にとって，子どもの発達が順調かどうかは大きな関心事であろう。発達については，特に遅れがみられる際に早く気づくことが重要である。例えば発達障害の場合，発達の領域によってその遅れの程度は異なる。根来・山下・竹田 (2004) や磯・小貫 (2005) が報告しているように，軽度発達障害の場合，平均と比べて言葉の遅れが顕著である。また，宮地 (2011) は，高機能広汎性発達障害児の早期徴候として，対人相互反応や社会性の発達の問題・言語発達の問題・興味の偏りやこだわりといった広汎性発達障害の 3 主徴に加え，運動機能に関係する問題もあることを指摘している。これらを踏まえると，様々な領域を区別した上で，それぞれの発達に気づけることが重要であるといえる。

ではそのような領域によって，気づきやすさに違いはあるだろうか。畠山・畠山 (2011) は，3-5 歳児の担任保育者 10 名を対象に，発達障害への気づきについて検討している。そして，保育者はこ

だわり・癖・常同行動に関する問題や社会性・対人関係に関する問題がみられた際に障害の可能性があると感じやすく，生活習慣に関する問題については発達に困難があるとは感じにくいことを示唆した。

障害の可能性を考える以前に，発達への気づきやすさが領域によって異なる可能性がある。そこで本研究の第 1 の目的として，保護者がどのような領域の発達に気づきやすいかを調査する。

保護者と保育者の認識の違い　子どもの発達についての保護者の認識は，保育者の認識と異なることが指摘されている。例えば，“気になる子”“気がかりの有無”について尋ねた場合，両者の認識が一致しない (強矢・諏訪, 2006; 丹羽・酒井・藤江, 2004)。この場合，保護者のほうが，気がかりがあまりみられないこと，保護者のほうが子どもの発達をより高く評価するという結果が得られていることが多い。また，発達障害のスクリーニング質問票を用い，リスクがあるかを尋ねた研究や (石川他, 2011), 気質や社会性に重きを置いた尺度を用いた研究もある (大神, 2011; 矢澤・栗崎・萩原・横山・海沼, 1999)。これらの結果からも，子どもの発達について保護者のほうがより楽観的であること，保育者は情緒面，保護者は向社会性の発達についてより心配していることなどがわかっている。

これらの研究結果から，保護者と保育者とでは子どもの発達についての認識に違いがあることがわかる。それは，保護者と保育者の間の連携において問題となっている点でもある。ただし上述の研究は，上に述べたような発達の領域を網羅して調べることを目的としていない。また，実際の発達の程度や子どもの状態についての認識を尋ねており，発達への気づきやすさを調べているわけではない。保護者と保育者を比較した場合，例えば保護者がより楽観的だなどというだけではなく，保護者が発達のある側面に気づきにくい等の特徴があるのかもしれない。そこで本研究の第 2 の目的として，保育者を基準とし，保護者の気づきやすさについて検討する。

育児の影響についての保護者の考え　東谷・林・木戸 (2009) によると，4 歳以降に診断を受けた知的障害の軽い PDD・LD・AD/HD の子どもの保護者は，特異な子どもの行動を障害とは認識せずに，自分の育児能力の低さが原因だと考えてしまうことがある。このように，発達の遅れや凸凹の原因が発達障害であることに気づかず自責感を抱える母親の存在は，これまでの研究でも指摘されている (松永・廣間, 2010; 柳楽・吉田・内山, 2004; 山根, 2011)。

保護者が発達の早さ遅さを“育児の方法のせい”と思っている場合，子どもに発達の遅れがみられてもさほど問題視しない可能性がある。そこで本研究の第 3 の目的として，様々な種類の行動の発達に育児がどの程度影響すると思うかを調査した。

本研究で使用するチェックリスト　先に述べたように，発達への気づきやすさについて調べるためには，発達の様々な領域を広く網羅する必要がある。多くの発達検査は，3-6 領域にわたる項目を備えている。例えば，遠城寺式乳幼児分析的発達診断検査は，運動 (移動運動・手の運動)，社会性 (基本的習慣・対人関係)，言語 (発語・言語理解) の 3 分野 6 領域について観察，チェックを行う検査である。津守・稲毛 (1961) の乳幼児発達診断は，運動・探索・社会・生活習慣・言語の 5 つの領域について発達の評価を行うことができる。新版 K 式発達検査 (生澤・松下・中瀬，1985) は姿勢・運動領域，認知・適応領域，言語・社会領域の 3 領域 21 項目から成る。デンバー発達判定法

は，個人-社会・微細運動-適応・言語・粗大運動の 4 領域について子どもの発達を評価することができる (日本小児保健協会, 2009)。

さらに，保護者が保育者とは違う認識をしている可能性があることを考慮し，本研究では保育者用のチェックリストを用いて保護者の気づきやすさを調べることとした。安梅他 (2007) は，上述した 4 つの発達検査の項目を参考にし，保育者が評価しやすい項目に作り替えた園児用発達チェックリスト案を作成している。このチェックリストでは，発達を運動 (粗大運動・微細運動), 言語 (表現・理解), 社会性 (生活技術・対人技術) の 6 領域 192 項目でチェックすることができるようになっている。安梅他がこのリストを用いて 22,819 名の子どもの発達状態を評価した結果，192 項目の序列が予測どおりであり，園児の発達を保育者が評価する指標として妥当であることが示されている。

方法

調査対象者　H 市，K 市内の保育園・幼稚園の 3 歳児クラスの保護者 125 名，4 歳児クラスの保護者 204 名に質問紙を配布した。有効回答数は，3 歳児保護者 72 名 (有効回答率 57.6%), 4 歳児保護者 114 名 (55.9%) であった。また，上記の保育園・幼稚園に勤務する 3 歳児担任保育者 7 名，4 歳児担任保育者 7 名に質問紙を配布した。有効回答数は，3 歳児保育者 7 名 (100%), 4 歳児保育者 3 名 (42.9%) であった。

調査実施時期　平成 24 年 12 月に質問紙の配布・回収を行った。

項目の選定　発達の気づきやすさや育児の影響について尋ねるためのチェック項目を作成した。安梅他 (2007) の園児用発達チェックリストの中から，3 歳児クラス用として 20 項目，4 歳児クラス用として 20 項目を選定した。3 歳児クラス用のチェック項目は，安梅他において基準年齢 2 歳 6 か月，2 歳 9 か月，3 歳 0 か月，3 歳 3 か月の 4 段階に該当する項目であった。4 歳児クラス用のチェック項目は, 基準年齢 3 歳 6 か月, 3 歳 9 か月, 4 歳 0 か月, 4 歳 4 か月に該当する項目であった。この 4 段階を選定したのは，子どもの多くがその項目の行動をすることができ，かつ，できるようになったのが比較的最近である項目を使用する必要があったためである。20 項目の中には，運動発達 (粗大運動・微細運動), 言語発達 (表現・理解), 社会性発達 (生活技術・対人技術) の 6 領域に該当する項目が含まれていた。項目の例を Table 1 に示す。

Table 1

調査に使用した発達チェック項目の例

領域	項目の例
運動（粗大）	ブランコに立ち乗りしてこげる (4歳児クラス)
運動（微細）	ボタンをはめられる (3歳児クラス)
言語（表現）	親の姓名、住所を言える (4歳児クラス)
言語（理解）	大きい、小さいが分かる (3歳児クラス)
社会性（生活）	上着を自分で脱げる (3歳児クラス)
社会性（対人）	ジャンケンで勝負を決められる (4歳児クラス)

質問紙の構成　保護者用質問紙は，次の 4 つのセクションから構成されていた。(a) フェイスシートにおいて，子どもの年齢，性別，回答者と子どもの関係を尋ねた。(b) 上記の 20 項目について，回答者の子どもがそれぞれの項目の内容をできると思うかを尋ねた。“できる”-“できない”の 4 件法で回答を求めた。(c) (b) で“できる”と回答した項目についてのみ，子どもがその行動をできるようになったことに気づきやすかったかを尋ねた。“とても気づきやすかった”-“とても気づきにくかった”の 4 件法で回答を求めた。(d) 育児の影響観として，各項目内容について，一般的に保護者の育児方法が子どもの発達にどの程度影響すると思うかを尋ねた。“とても影響すると思う”-“ほとんど影響しないと思う”の 4 件法で回答を求めた。

保育者用質問紙では，担当している園児が“その項目の内容をできるか”について，把握しているかを尋ねた。“ほとんどの子についてわかる”-“ほとんどの子についてわからない”の 4 件法で回答を求めた。

手続き　保護者用質問紙については，保育園・幼稚園で配布して持ち帰ってもらい，約 1 週間後までに提出してもらった。保育者用質問紙については，担当保育者に渡し，回答後に提出してもらった。

結果

保護者の結果

回答者と子どもの属性　3 歳児クラスの保護者については，子どもの性別は男児が 39 名，女児が 33 名であった。子どもの平均年齢は 4 歳 2 か月であった。回答者は，母親が 68 名，父親が 4 名であった。4 歳児クラスの保護者については，子どもの性別は男児が 64 名，女児が 50 名であった。子どもの平均年齢は 5 歳 1 か月であった。回答者は，母親が 112 名，父親が 2 名であった。

できるかどうか　保護者用質問紙の(b) で尋ねた，回答者の子どもがその項目内容をできるかどうかについては，“できる”を 4 点，“たぶんできる”を 3 点，“たぶんできない”を 2 点，“できない”を 1 点として得点化した。3 歳児クラス用，4 歳児クラス用の 20 項目について，参加者の平均値を算出したところ，3 歳児クラスの保護者については全ての項目の平均得点が 3.6 以上であり，多くの保護者が多くの項目について“できる”と回答していた。4 歳児クラスの保護者についても同様に，多くの項目の平均得点が 3.6 以上であった。ただし，平均得点が 3 に満たない項目が 2 つあった。特に平均得点が低かった項目は“親の姓名，住所を言える”である。この項目については，自由記述において“親の名前や住所は教えていない”という回答が複数みられた。全体的には，想定したとおり多くの項目で“できる”という回答が得られ，気づきやすさについて回答を求めることができた。

気づきやすさ　保護者用質問紙の (c) で尋ねた気づきやすさについても，気づきやすいほど得点が高くなるよう，回答を 1-4 点で得点化した。3 歳児クラス用，4 歳児クラス用の 20 項目について，参加者の平均値を算出したところ，3 歳児クラスの保護者については全ての項目の評定値が 3.2 以上であり，多くの保護者が多くの項目で“気づきやすい”と回答していた。4 歳児クラスの保護者についても，全ての項目の評定値が 3.0 以上であった。

その中でも，領域によって，チェック項目にあるような内容については比較的気づきにくい領域がある可能性がある。そこで，領域ごとに，その領域に含まれる項目への回答の平均値を算出し，その領域の気づきやすさ得点とした (Table 2)。

気づきやすさが領域によって異なるかを検討するため，1 要因分散分析を行った。3 歳児・4 歳児クラスの保護者のいずれにおいても領域の効果は有意であった (順に，$F(5,335) = 2.86$, $p=.015$; $F(5,565) = 9.17$, $p=.000$)。Bonferroni 法による多重比較の結果，3 歳児クラスの保護者の場合，生活技術領域において理解領域より得点が高かった。4 歳児クラスの保護者の場合，生活技術領域において粗大運動・微細運動・表現・理解領域より得点が高かった。また，対人技術領域において，微細運動・表現領域より得点が高かった。

次に，3 歳児・4 歳児クラスの保護者の間で，領域別の気づきやすさが異なるかを検討するため，*t* 検定を行った。その結果，微細運動領域と表現領域において，クラス間に有意差が認められた (順に，$t(182) = 3.01$, $p=.003$, *ES:* $d= 0.40$; $t(177) = 2.57$, $p=.011$, *ES:* $d= 0.16$)。いずれも，3 歳児クラスの保護者のほうが 4 歳児クラスの保護者より得点が高かった。

なお，項目別の得点でも領域別の得点でも，3 歳児クラス 4 歳児クラスいずれについても，子どもの性別によって気づきやすさに違いはみられなかった。

育児の影響観　保護者用質問紙の (d) で尋ねた育児の影響観についても，影響があると評定したほど得点が高くなるよう，回答を 1-4 点で得点化した。領域ごとに，その領域に含まれる項目への

Table 2

保護者の気づきやすさの領域別平均得点

子どもの		運動		言語		社会性	
クラス		粗大	微細	表現	理解	生活	対人
3歳	**平均**	**3.61**	**3.61**	**3.55**	**3.53**	**3.66**	**3.50**
	SD	0.52	0.51	0.49	0.52	0.42	0.61
4歳	**平均**	**3.45**	**3.33**	**3.28**	**3.36**	**3.65**	**3.55**
	SD	0.73	0.76	0.89	0.82	0.71	0.67

Table 3

育児の影響観の領域別平均得点

子どもの		運動		言語		社会性	
クラス		粗大	微細	表現	理解	生活	対人
3歳	**平均**	**2.34**	**3.06**	**2.94**	**2.99**	**3.25**	**2.97**
	SD	0.19	0.24	0.29	0.02	0.03	0.25
4歳	**平均**	**2.42**	**2.63**	**2.97**	**3.17**	**3.49**	**3.36**
	SD	0.65	0.66	0.54	0.62	0.48	0.47

回答の平均値を算出し，その領域の育児の影響観得点とした (Table 3)。

育児の影響観が領域によって異なるかを検討するため，1 要因分散分析を行った。3 歳児・4 歳児クラスの保護者のいずれにおいても領域の効果は有意であった (順に，$F(5,335) = 33.72$, $p=.000$; $F(5,565) = 121.05$, $p=.000$)。Bonferroni 法による多重比較の結果，3 歳児クラスの場合，生活技術領域において粗大運動・微細運動・表現・対人技術領域より得点が高く，粗大運動領域において他の 5 領域より得点が低かった。4 歳児クラスの保護者の場合，全ての領域間に差があり，生活技術，対人技術，理解，表現，微細運動，粗大運動の順で得点が高かった。

次に，3 歳児・4 歳児クラスの保護者の間で，領域別の育児の影響観が異なるかを検討するため，*t* 検定を行った。その結果，微細運動領域においては，3 歳児クラスの保護者のほうが有意に得点が高かった ($t(184) = 4.49$, $p=.000$, *ES:* $d=0.68$)。逆に，生活技術・対人技術領域においては，4 歳児クラスの保護者のほうが有意に得点が高かった (順に，$t(184) = 3.09$, $p=.004$, *ES:* $d=0.47$; $t(184) = 4.91$, $p=.000$, *ES:* $d=0.73$)。

なお，項目別の得点でも領域別の得点でも，3 歳児クラス 4 歳児クラスいずれについても，子どもの性別によって育児の影響観に違いはみられなかった。

保育者の結果

各項目の行動について，園児ができるかどうかがわかりやすいと保育者が回答しているほど得点が高くなるよう，回答を 1-4 点で得点化した。3 歳児クラス用，4 歳児クラス用の 20 項目について，参加者の平均値を算出したところ，3 歳児クラスの場合，保護者と同様，保育者も多くの項目について“わかる”と回答していた。一方，4 歳児クラスの場合，参加者が 3 名と少なかったことの影響が大きいが，得点の低い項目もあった。特に粗大運動領域では比較的得点が低い項目があった。そこで領域ごとに，その領域に含まれる項目への回答の平均値を算出し，その領域の得点とした。その結果を Table 4 に示す。

平均値をみると，3 歳児クラスの保育者の場合，生活技術領域で最も得点が高く，粗大運動領域で最も得点が低い。また，4 歳児クラス保育者の場合，対人技術領域で最も得点が高く，粗大運動領域で最も得点が低い。また，年齢が上がるとともに対人技術領域の得点が大きく上昇し，粗大運動・表現領域の得点が大きく下降している。

Table 4

園児が当該行動をできるかのわかりやすさについての項目別平均得点領域別平均得点

子どもの		運動		言語		社会性	
クラス		粗大	微細	表現	理解	生活	対人
3歳	**平均**	**3.14**	**3.39**	**3.61**	**3.24**	**3.76**	**3.24**
	SD	0.54	0.32	0.38	0.50	0.32	0.60
4歳	**平均**	**2.33**	**3.25**	**2.78**	**3.33**	**3.56**	**3.78**
	SD	1.04	1.09	0.84	0.67	0.77	0.39

Table 2 に示した保護者の気づきやすさの領域別平均得点と Table 4 に示した保育者にとってのわかりやすさの領域別平均得点を比較すると，全般的に，運動や言語発達の領域では，保護者のほうが得点が高いか，差が小さいという結果であった。社会性発達領域では逆に，保育者のほうが得点が高い場合があった。

考察

本研究の目的は，(a) 保護者がどのような領域の発達に気づきやすいかを調べること，(b) 保育者を基準としたときの，保護者の気づきやすさについて検討すること，(c) 様々な種類の行動の発達に育児がどの程度影響すると思うかを検討することであった。

気づきやすさ　発達への保護者の気づきやすさを領域ごとにみると，3 歳児クラスの保護者の場合，生活技術の発達に気づきやすく，言語理解の発達には比較的気づきにくいことがわかった。生活技術は日常生活において毎日のように観察される項目であるため，ほとんどの保護者が気づくと考えられる。言語理解については，“高い，低いがわかる”のような項目でチェックされるが，どのような言葉をどの年齢でわかるのが標準的なのかということについては，保護者が知る機会が少ない場合があるのではないか。また，他児とも比較しにくい項目であると考えられる。子どもに実際に試してみればわかるが，そのように意図的にチェックをしないままであれば，理解が多少遅れていても気づきにくい可能性はある。

4 歳児クラスの保護者の場合も，やはり生活技術の発達については気づきやすい。さらに，対人技術の発達について，微細運動や言語表現の発達よりも気づきやすいことがわかった。4 歳児クラスの子どもについては，他児とのコミュニケーションなどの対人技術が重要であると保護者が考えている可能性がある。また，微細運動や表現の発達に気づきにくいのは，4 歳児クラスの子どもになると，基準となる微細運動や言語表現が 3 歳児クラスより複雑になるため，必ずしも日常生活の中で観察していないという原因が考えられる。

さらに保護者と保育者の気づきやすさの結果から，本研究で用いた項目は保育者用につくられたチェック項目であったものの，保護者が全般的に気づきやすいと回答していることがわかる。保護者が保育者より気づきにくい可能性が高いのは社会性の発達についてであったが，これは，他児との関わりや集団内での行動を保育者のほうが観察しやすいためという原因が考えられる。また，保育者の結果をみると，保育者が他の領域の発達より社会性の発達を重視して観察しているという可能性もある。

育児の影響観　保護者が発達の遅れを自分の育児能力の低さが原因だと考えてしまう場合，遅れと認識しにくくなる可能性がある。したがって，育児の影響が強いと保護者が考えやすい領域については“育児のしかたが原因”のように解釈し，発達の遅れを放置しやすくなるかもしれない。

領域ごとの違いをみると， 3 歳児・4 歳児クラスのいずれの保護者も，生活技術については，育児の影響が大きいと考えていることがわかる。そして，粗大運動の発達に関しては，他の領域の発達より育児の影響が小さいとみなされている。生活技術については，いわゆるしつけにあたるものであり，もともとそのようなことが苦手な子どもがいるという考えはあまりなく，できないのであ

れば親が教えていないから，と考えやすいことがわかる。しかし，生活技術について親が教えても，その言葉等になかなか注意が向きにくい子どもなどもいる。そのような場合，“この子は苦手なのかな”と考えるよりも“しつけが足りない”と感じやすい可能性がある。

今後の展望　本研究では参加した保育者の数が少なく，保護者との比較は十分に行えなかった。保育者の視点にも個人の考え方や経験などによる個人差があることを考慮すると，さらに多くの，経験年数の異なる保育者による検証が必要であると考えられる。

引用文献

安梅勅江・篠原亮次・杉澤悠圭・丸山昭子・田中　裕・酒井初恵・宮崎勝宣・西村真美 (2007). 子どもの発達の全国調査にもとづく園児用発達チェックリストの開発に関する研究　厚生の指標, **54**, 36-41.

日本小児保健協会 (2009). DENVERⅡ―デンバー発達判定法―　日本小児医事出版社

畠山美穂・畠山　寛 (2011). 発達障害とみられる幼児に関する保育者の気づきと対応　北海道教育大学紀要教育科学編, **61**, 101-107.

東谷敏子・林　隆・木戸久美子 (2010). 発達障害児を持つ保護者のわが子の発達に対する認識についての検討　小児保健研究, **69**, 38-46.

生澤雅夫・松下　裕・中瀬　淳 (編著) (1985). 新版 K 式発達検査法　ナカニシヤ出版

石川有美・大六一志・長崎　勤・園山繁樹・宮本信也・野呂文行・多田昌代・岡崎慎治・東原文子・竹田一則・柿澤敏文 (2007). 5 歳児発達障害スクリーニング質問票の妥当性の検証 障害科学研究, **31**, 75-89.

磯　麻奈美・小貫　悟 (2005). 軽度発達障害 (LD，ADHD，高機能自閉症) の生育歴に関する研究 明星大学研究紀要―人文学部―, **41**, 147-164.

強矢秀夫・諏訪きぬ (2006). 乳幼児の発達保障と幼保問題 (その 3) 幼稚園と保育園における保護者と保育者の子どもの発達的理解の差の分析を中心に 明星大学教育学研究紀要, **21**, 57-65.

松永しのぶ・廣間貴子 (2010). 自閉症スペクトラム障害児の母親の診断告知に伴う感情体験　昭和女子大学生活心理学研究所紀要, **12**, 13-24.

宮地泰士 (2011). 高機能広汎性発達障害の早期徴候に関する予備的研究　脳と発達, **43**, 239-240.

柳楽明子・吉田友子・内山登紀夫 (2004). アスペルガー症候群の子どもを持つ母親の障害認識に伴う感情体験―「障害」として対応しつつ「この子らしさ」を尊重すること―　児童青年精神医学とその近接領域, **45**, 380-392.

根来あゆみ・山下　光・竹田契一 (2004). 軽度発達障害児の主観的育てにくさ感　発達, **25**, 13-18.

丹羽さがの・酒井　朗・藤江康彦 (2004). 幼稚園，保育所，小学校教諭と保護者の意識調査: よりよい幼保小連携に向けてお茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, **2**, 39-50.

大神優子 (2011). 「気になる子」に対する保育者と保護者の評価 - SDQ (Strengths and Difficulties Questionnaire) を利用して　和洋女子大学紀要, **51**, 179-188.

津守　真・稲毛教子 (1961). 乳幼児精神発達診断法　大日本図書

山根隆宏 (2011). 高機能広汎性発達障害児をもつ母親の診断告知時の感情体験と関連要因　特殊教育学研究, **48**, 351-360.

矢澤圭介・栗崎久美子・萩原亜希・横山直美・海沼和代 (1999). 子どもの気質評価の親―保育者間での「ずれ」について―その 1:保育者の子ども理解への応用 立正大学社会福祉研究所年報, **1**, 137-152.